

ボランティア活動を活用したアダプテッド・スポーツの 授業実践と今後の展望

稲井 勇仁^{*1}・加藤 秀太^{*2}・佐藤 敬広^{*3}

要旨:学部や他の高等教育機関の垣根を超えた活動事例は、今後のアダプテッド・スポーツ教育の可能性を模索する一事例となり得る。本稿ではアダプテッド・スポーツ科目である「アダプテッド・スポーツ基礎実習」の一環として実施したボランティア活動の事例を示し、今後の課題を検討することを目的とした。本科目は現代社会学や理学療法学を専攻している大学生が履修した。「第31回宮城県・仙台市障害者スポーツ大会陸上競技大会」でのボランティア活動には、計6団体(計69名)の学生が参加した。学生は肢体不自由や視覚障害などの選手を招集エリアから競技スタート場所へ誘導した。これらの経験は障がい当事者との直接的な交流により具体的なサポート方法を習得し、大会運営のノウハウを学ぶ機会となった。今後は学部間および学校間交流の充実、日常生活の支援方法に関する教育内容の充実、アンケート調査を用いた教育効果の検証を検討していく必要がある。

キーワード: パラスポーツ、学外教育、教育効果、共生社会、交流

I. 緒言

1. 大学教育におけるアダプテッド・スポーツ

我が国では1964年に東京で開催されたパラリンピックを契機に、身体に障害のある人々のスポーツ参加が盛んになった。スポーツのルールや用具を障害の種類や程度に適合(adapt)させることによって、障害のある人はもちろんのこと、幼児から高齢者、体力の低い人であってもスポーツに参加することが可能となる¹⁾。これらの特徴を有するスポーツを総称してアダプテッド・スポーツ(Adapted Sports, 以下; AdS)と呼ぶ。このAdSという概念は、障害

のある人がスポーツを楽しむためには、その人自身と、その人を取り巻く人々や環境を問題として取り上げ、両者を統合したシステムづくりこそが大切であるという考え方に基づくものである¹⁾。よって、AdSはあらゆる人々が身体活動に親しむ機会として有益であると考えられる。

我が国の大学教育においてAdSを扱う事例があり、科目の目的や展開方法が報告されている^{2)~6)}。佐藤(2012)は大学教育において全14回の「生涯スポーツ」の科目の中で5回分のAdSを実施したことを報告した²⁾。佐藤(2016)は大学教育において「アダプテッド・スポーツ

*1 東北文化学園大学現代社会学部

*2 一般社団法人はびねすの羽根

*3 東北福祉大学総合福祉学部

基礎実習」の科目でフィールドワークとして宮城県・仙台市障がい者スポーツ大会のボランティア活動を行ったことを報告した³⁾。また、宮本(2022)は大学の科目内でアンプティサッカーを主としたAdS教育のプログラムを実践し、アンプティサッカー日本代表選手を5名招聘し、講義や体験会、選手によるトークセッションを行ったことを報告した⁶⁾。このようにAdS科目は様々な方法で展開されている。

2. アダプテッド・スポーツにおける教育効果

我が国の大学におけるAdS教育では、その教育効果が報告されている。大山(2017)は一般体育科目の「体育I」でAdSを取り入れた⁴⁾。履修学生の感想からは、授業が貴重な体験をできる場としての機能を持ち、AdSの理解を促し、新たな価値観に気づかせる機会となったことを報告した。また、アンプティサッカー体験会へ参加した大学生のパラスポーツに対するイメージが肯定的に変化したことから、障がい者との直接的な関わりの重要性が報告されている⁷⁾。これらの報告から、大学生に対するAdSの教育効果が期待されている。

一方で、永浜と藤村(2011)はAdS科目の受講後も「アダプテッドスポーツ＝障がいのある人のスポーツ」という認識が残っていたことを示した⁸⁾。そのため、AdSが障がい者や高齢者を含むすべての人が行うことのできるスポーツであるという認識を持たせるよう丁寧な説明が必要であることを指摘した。また、三浦と小田(2011)は学生自らが積極的に考えて工夫することのできるスポーツの開発および体験環境を準備することが重要であることを指摘している⁹⁾。このようにAdSの科目を実施する際は留意すべき事項があると考えられる。

スポーツ大会ではボランティアスタッフの活躍が必要不可欠である。山田(2006)はボランティア活動を経験することによって障がい者意識がプラスに影響すること、障がい者と直接的に関係をもつ機会が多いほど意識の変化にプラスの効果が作用されることを示した¹⁰⁾。また、パラスポーツのボランティア経験が無い者が9割いた調査では、パラスポーツにおけるボランティアの普及は急務であると述べられている¹¹⁾。

よって、AdSの科目においてもAdSを体験するだけでなく、障がい者と直接接する機会やボランティア活動も実施することで障害や障がい者への理解が促進すると考えられる。

しかしながら、AdSの科目の一環として学生が参加するパラスポーツのボランティア活動において、大会運営にかかわる学生の役割および選手への支援方法を検証したケースは少ない。今後のAdS教育の可能性を模索することで、我が国における障がい者理解や共生社会の実現に近づくと考えられる。

3. 本稿の目的

そこで、本稿ではAdSの科目である「アダプテッド・スポーツ基礎実習」の一環として実施したボランティア活動の事例を示すとともに、今後のAdS科目の課題について検討することを目的とした。

II. AdS科目の実践内容

1. 「アダプテッド・スポーツ基礎実習」の概要

本学現代社会学部現代社会学科および医療福祉学部リハビリテーション学科理学療法学専攻では、公益財団法人日本パラスポーツ協会公認の初級パラスポーツ指導員の資格を取得することができる。取得するためには「アダプテッド・スポーツ基礎実習」(1単位・実技科目・現代社会学部現代社会学科は1年次開講、医療福祉学部リハビリテーション学科理学療法学専攻は3年次開講)および「アダプテッド・スポーツ論」(2単位・講義科目・現代社会学部現代社会学科は1年次開講、医療福祉学部リハビリテーション学科理学療法学専攻は3年次開講)の単位取得が必須である。本稿では、2023年4月から7月にかけてすでに開講された「アダプテッド・スポーツ基礎実習」(以下;本科目)に焦点を当てて記述する。

本科目は、東京2020パラリンピック競技大会で情報戦略・医科学サポートに従事した経験のある本学専任教員1名と県内パラスポーツ協会の地域コーディネーターを担う本学非常勤講師1名の計2名で実施した。本科目には現代社会学科1年生4名、2年生1名、理学療法学専攻

3年生2名の計7名が参加した。加えて、第3回目から第10回目にかけて実施した大会ボランティアには、本科目を履修せず学生自ら参加の意思を示した理学療法学専攻1年生1名、作業療法学専攻3年生2名の計3名も参加した。本科目における学習の到達目標は、「障がい児者を含めた全実施者に適応したアダプテッド・スポーツの実践およびサポート活動を通じて、ルールや基本的なスポーツ技術、支援方法を習得することができる」ことであった¹²⁾。

本科目は土曜日と日曜日の集中科目として、100分間を21回実施した。第1,2回目は本学の教室にて科目ガイダンス、大会ボランティアに向けた事前説明、映像を用いたパラ陸上競技に関する講義を行った。第3-5回目は弘進ゴムアスリートパーク仙台にて大会ボランティアの前日準備を行った。第6-10回目は弘進ゴムアスリートパーク仙台にて大会ボランティアに参加した。第11-13回目は本学の体育館にてバスケットボール用車いすを使用し、車いすの操作練習や車いすバスケットボールを行った。第14-17回目はポッチャやシッティングバレーボール、第18-21回目はゴールボールを行った。

2. 第31回宮城県・仙台市障害者スポーツ大会陸上競技大会の概要

第31回宮城県・仙台市障害者スポーツ大会陸上競技大会（以下；本大会）は、2023年5月14日に弘進ゴムアスリートパーク仙台にて実施され、特別全国障害者スポーツ大会選考会として開催された。本大会は「スポーツを通じて体力の維持・増進を図り、明朗快活かつ積極的な性格と協調精神を養い、明るい生活の形成に寄与するとともに、県民・市民との交流により、障害者に対する深い理解と関心の高揚を期し、もって障害者の社会参加促進に資すること」を目的として開催された¹³⁾。本大会では障害区分によって実施する種目は異なるが、50m、100m、200m、400m、800m、1500m、スラローム、4×100mリレー、走高跳、立幅跳、走幅跳、砲丸投、ソフトボール投、ジャベリックスロー、ピーンバッグ投が実施された。本大会へ出場した選手人数は261名、大会スタッフは409名であった。

3. 大会ボランティアに向けた事前準備

大会ボランティアに向けて、著者らは2023年3月、4月、5月に開催された第31回宮城県・仙台市障害者スポーツ大会陸上競技大会実行委員会（以下；本委員会）へ出席した。本委員会では、総務係、招集係、誘導係、競技係、会場係、受付係、式典・表彰係、記録係に分かれて大会当日の業務内容を検討した。学生ボランティアの多くは誘導係を担当するため、本委員会では学生ボランティアの配置や業務内容を中心に検討した。学生ボランティアの募集は、本委員会メンバーである宮城県障害者スポーツ協会の職員が各教育機関へ募集した。本委員会で学生ボランティアを振り分けた結果、A大学の学生25名、A大学のAdSサークルに所属している学生6名、B大学の学生10名、C短期大学の学生4名、D専門学校の学生9名、E専門学校の学生15名（計6団体、69名）が誘導係として担当することになった。著者らは学生ボランティア1名あたり2種目で誘導するように配置した（表1）。配置を検討する際は、1種目目と2種目目の間の時間に余裕を持たせること、本大会当日の学生ボランティアの欠席を想定して表1の「※調整可」のように学生ボランティアが他の種目を担当できるよう人数に余裕を持たせること、学生間のコミュニケーションや連絡事項をスムーズにできるよう同じ学校同士の学生で配置すること、参加選手数の多い種目に対してはより多くの学生ボランティアを配置することとした。

4. 大会ボランティアにおける前日および当日の取り組み

B大学の学生9名は本大会前日に伴走用のゼッケンの準備（図1）、テントの設営、本大会会場のレイアウトの確認を行った。

大会当日は計6団体（計69名）が学生ボランティアとして選手の誘導係を担当した。学生ボランティアの中で本大会当日に欠席者が出た場合は、表1の「※調整可」の学生ボランティアと入れ替えた。誘導係は、①競技名が書かれているプラカードを持ちながら担当する選手を招集所で集め、②招集所から競技開始場所まで誘導し（図2）、③競技開始場所で競技に使用し

ない選手の衣類を保管し、④競技終了場所から解散所へ誘導した。著者らは競技開始前に学生ボランティアへ業務方法を一齐に説明するとともに、競技場内ではスマートフォンを扱わないよう注意した。学生ボランティアは大会の部門にあたる肢体不自由、視覚障害、聴覚・平衡機能障害、音声・言語・そしゃく機能障害、知的障害、内部障害、精神障害の選手とコミュニケーションを取りながら誘導係を担った。これらの経験は障がい当事者との直接的な交流により具体的なサポート方法を習得するとともに、大会運営のノウハウを学ぶ機会となった。



図 1. 大会前日のゼッケン準備の様子



図 2. 大会当日の選手誘導の様子
(選手は○、誘導係は●)

Ⅲ. 今後の展望

1. 学部間および学校間交流の充実

佐藤 (2016) は従来、保健福祉学科保健福祉専攻のみに開講されていた AdS 関連科目を医

療福祉学部の全学科、全専攻、全学年が集中講義形式で履修できるように開講した³⁾。その結果、学科間交流が可能となり、AdS 教育の再構築と理解啓発につながることを示された。本学現代社会学部現代社会学科では、共生社会を実現するための幅広い視野と柔軟な思考、そして知識と技能を持った人材を養成している¹⁴⁾。また、本学医療福祉学部 リハビリテーション学科理学療法学専攻では、理学療法士の養成校として自分で考え、調べ、解決できる「自主性」を備え理学療法学を専門的に学んでいる学生¹⁵⁾の知識や考え方を共有したことで、多角的な視点で AdS を捉えることにつながったと推察される。

本ボランティア活動には、6つの高等教育機関(計69名)の学生ボランティアが誘導係として活躍した。2023年度の本ボランティア活動は活動当日の欠席者に対して迅速かつ臨機応変に対応するために、競技ごとに同じ学校の学生になるように配置した(表1)。このように、本稿の新規性は AdS 科目を活用して他の高等教育機関と合同で実施した活動事例とともに、本委員会で検討した配置や取り組みの様子を詳細に示している点にある。しかし、2023年度は学校間での交流を実施することが叶わなかった。新型コロナウイルス感染症拡大の影響から社会とのつながりに対する満足度も低下していることから¹⁶⁾、学生にとっては学校の垣根を超えた積極的な交流も重要であると考えられる。そのため、2024年度の本ボランティア活動では、競技ごとに異なる学校の学生を配置することで学校間交流も期待でき得る。同じ学校の学生同士であればコミュニケーションや連絡がスムーズに行われることが期待されるが、異なる学校の学生を組み合わせることでその利点が失われる。異なる学校の学生を組み合わせても情報伝達に問題が生じないようにするための対策として、事前に Zoom (Zoom Video Communications, Inc.) などを用いたオンライン会議形式での顔合わせやグループごとに連絡し合える Slack (Slack Technologies, Inc.) などのコミュニケーションツールを用いることが挙げられる。

2. 日常生活を対象とした教育

本科目ではボランティア活動への参加に加えて、AdSの体験として車いすバスケットボール、ボッチャ、シッティングバレーボール、ゴールボールを実施した。一方で、本科目は履修生である大学生のみでAdSを体験したため、障がい者の日常生活の様子や支援方法を学ぶ機会までには至らなかった。これまで、学生が障がい者や高齢者との接触体験をもつことで、障がい者や高齢者に対して肯定的な印象をもつようになったことが報告されている^{17)~19)}。そのため、今後はより一層の障がい者や高齢者への理解促進に向けて、まずは、本科目で対象とした障がい者や高齢者など多様な身体的および精神的特徴をもつ人々と一緒にAdSを体験する場を設けることが望ましいと考えられる。そして、その後にスポーツ現場だけでなく、当事者の日常生活に着目して当事者の様子や支援方法を学ぶこともAdS科目を開講する意義があると考えられる。これらの経験を通して、福祉や共生社会について考えるきっかけとなり得ることが期待される。

3. 教育効果の検討

本稿では、AdSの科目である「アダプテッド・スポーツ基礎実習」の一環として実施したボランティア活動の事例を示した。本科目の学習到達目標である「障がい児者を含めた全スポーツ実施者に適応したアダプテッド・スポーツの実践およびサポート活動を通じて、ルールや基本的な技術、支援方法を習得することができる」ことにおいては、履修生全員が目標を達成することができた。一方で、本稿では本科目を履修したことでどの程度AdSに関する理解が深まり、AdSへのイメージが変化したのかまでは検討していない。今後、先行研究と同様に、AdSの授業やイベント前後にアンケート調査を実施することで教育効果を検討できると考えられる^{8), 20)}。

本ボランティア活動には過去に本科目を履修していた卒業生も社会人として働きながら参加していた。今後、本学でAdS科目を履修した卒業生にインタビューし、社会に出て本科目が役に立ったのかを調査することでAdS科目の

意義や課題を詳細に検討することができる。また、我が国では日常生活において様々なストレスを受けていることが報告されている²¹⁾。多くの先行研究では運動が気分の改善に有効であることが示されている^{22)~24)}。したがって、あらゆる人々に適応されたAdSは一般的なスポーツよりも人を選ばずに様々な特徴を超えて気分の改善に取り組める点で魅力がある。そのため、AdS科目は現代社会を生き抜いていく学生にとって可能性を秘めた科目であると考えられる。

IV. おわりに

本科目はAdSを体験するとともに、学部や他の高等教育機関の垣根を超えてボランティア活動を実施した。これらの経験は障がい当事者との直接的な交流により具体的なサポート方法を習得しながら、大会運営のノウハウを学ぶ機会となった。今後は学部間および学校間交流の充実、日常生活の支援方法に関する教育内容の充実、アンケート調査を用いた教育効果の検証を検討していく必要がある。

謝辞

本ボランティア活動でお世話になりました一般社団法人宮城県障害者スポーツ協会の皆様に、心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 矢部京之助. アダプテッド・スポーツの提言. ノーマライゼーション 障害者の福祉 1997;17:17-19.
- 2) 佐藤紀子. 「アダプテッド・スポーツ」の授業が歯学部生のスポーツや障害者に対する意識に及ぼす影響. 日本大学歯学部紀要 2012;40:49-56.
- 3) 佐藤敬広. 本学における「アダプテッド・スポーツ教育」および「障がい者スポーツ指導者養成」について ~他学部開講による学部共通教育の可能性を考える~. Journal of health & social services 2016;14:49-55.
- 4) 大山祐太. 大学の一般体育におけるアダプテッド・スポーツ実践の教育効果. 北海道

- 教育大学紀要 2017;67:267-276.
- 5) 加地信幸, 河野喬, 相川貴裕. 大学生のアダプテッド・スポーツ関連授業受講による教育効果の検討 ～障害者との関わり、および障害者イメージに着目して～. 人間健康学研究 2022;5:41-48.
 - 6) 宮本彩. 大学体育における教材としてのアダプテッド・スポーツ. 体育・スポーツ教育研究 2022;23:29-32.
 - 7) 宮本彩, 元嶋菜美香, 元安陽一, 他. スポーツを専攻する学生のためのアダプテッド・スポーツ教育の充実をめざして. 長崎国際大学教育基盤センター紀要 2018;1:81-89.
 - 8) 永浜明子, 藤村弘子. アダプテッド・スポーツ体験による大学生の意識変化に関する事例報告(第I報) - アダプテッド・スポーツ導入に向けた授業自己評価の観点から -. 大阪教育大学紀要 2011;60:39-49.
 - 9) 三浦敏弘, 小田慶喜. 健康を支援するスポーツ文化研究 - アダプテッドスポーツ理解への授業研究 -. 人間健康学研究 2011;3:19-29.
 - 10) 山田力也. 障害者スポーツボランティア活動者の意識変容と役割構造に関する研究. 西九州大学・佐賀短期大学紀要 2006;37:11-18.
 - 11) 塩田琴美, 徳井亜加根. 障がい者スポーツにおけるボランティア参加に影響を与える要因の検討. 体育学研究 2016;61:149-158.
 - 12) 東北文化学園大学. 現代社会学部授業概要(シラバス). http://923.tbgu.ac.jp/file/2023/001_tbgu_syllabus_cs_20230330.pdf?_gl=1*16p54zd*_ga*NTQyNjAwNjA1LjE3MDM1Nzc1NTE.*_ga_LJXKKYD68R*MTcwMzU4MzAxNS4yLjAuMTcwMzU4MzAxNS42MC4wLjA. (最終閲覧日; 2023年12月26日).
 - 13) 宮城県, 仙台市, 一般社団法人宮城県障害者スポーツ協会, 一般社団法人仙台市障害者スポーツ協会. 第31回宮城県・仙台市障害者スポーツ大会 開催要綱. https://mpsa.jp/cms/wp-content/uploads/2023/02/2023-outline_2-1.pdf (最終閲覧日; 2023年12月26日).
 - 14) 東北文化学園大学. 現代社会学部現代社会学科. <https://www.tbgu.ac.jp/faculty/cs> (最終閲覧日; 2023年10月7日).
 - 15) 東北文化学園大学. 医療福祉学部リハビリテーション学科理学療法学専攻. <https://www.tbgu.ac.jp/faculty/pt> (最終閲覧日; 2023年10月7日).
 - 16) 内閣府. 新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査. 2020;1-34.
 - 17) 長岡真希子, 山路真佐子, 小笠原サキ子, 他. 看護大学生の障害者福祉援助実習における障害者に対する印象と実習からの学び. 秋田大学医学部保健学科紀要 2004;12:37-47.
 - 18) 福永ひとみ, 佐々木三和, 那須実千代. 当事者参加授業を経て精神看護学実習を体験した学生の対象理解と学生への影響. 川崎市立看護短期大学紀要 2011;16:107-114.
 - 19) 伊藤豊美, 住垣千恵子, 後藤友美, 他. 老年看護学実習における看護学生の高齢者に対するイメージの変化. 国立看護大学校研究紀要 2010;9:37-42.
 - 20) 西垣景太, 上田ゆみ子, 藤丸郁代, 他. 障がい者スポーツイベントの学生への教育的効果 - 障がい者に対するイメージの変化及びコミュニケーション能力への影響 -. 中部大学教育研究 2012;12:55-58.
 - 21) 厚生労働省医薬・生活衛生局生活衛生・食品安全企画課. 令和4年度 健康実態調査結果の報告. 2023;1-308.
 - 22) 竹中晃二, 上地広昭, 荒井弘和. 一過性運動の心理学的反応に及ぼす特性不安および運動習慣の効果. 体育学研究 2002;47:579-592.
 - 23) 牛島一成, 志村正子, 渡辺裕晃, 他. 有酸素運動が体力および精神状態に及ぼす長期的影響と短期的精神影響. 心身医学 1998;38:259-266.
 - 24) 永松俊哉, 北畠義典, 泉水宏臣. 低強度・短時間のストレッチ運動が深部体温、ストレス反応、および気分 に及ぼす影響. 体力研究 2012;110:1-7.

Course Practice and Future Prospects for Adapted Sports Using Volunteer Activities

Yuto INAI, Shuta KATO, Takahiro SATO

Abstract

Examples of activities that transcend the boundaries of faculties and other institutions of higher education can serve as a case study to explore the possibilities for future adaptive sports education. The purpose of this study was to present an example of volunteer activities conducted as part of the AdS course "Basic Practice in Adapted Sports" and to examine future issues. This course was taken by university students majoring in contemporary sociology and physical therapy. A total of 6 groups (69 students in total) participated in volunteer activities at the "31st Miyagi and Sendai City Athletic Meet for the Disabled. The students guided athletes with physical disabilities and visual impairments from the muster area to the competition start area. These experiences provided an opportunity to learn specific support methods through direct interaction with people with disabilities, as well as to gain know-how in competition management. In the future, it is necessary to consider enhancing inter-faculty and inter-school exchanges, improving the educational content regarding daily life support methods, and verifying the educational effects using a questionnaire survey.

Key word : para sports, extramural education, educational effects, symbiotic society, exchange